典座について

妙心寺本坊での火番と典座の研究 その2

THE NAME OF TENZO

The study of koban and tenzo in Myoshinji main temple

平井俊行*

Toshiyuki HIRAI

This paper examines the status, duties, and evolution of the temple office known as koban (Fire Watchman's Office) based upon study of historical documents related to the Rinzaï Zen monastery Myoshinji. From 1842 onward, however, the title of office changed to tenzoryo (Monastery Cook's Office) and was filled on a yearly basis by two monks jointly appointed to the Office of the Chief Seat (shuso) within the monastery's Western Rank (seiban; the branch of monastic bureaucracy which oversaw the spiritual growth of the monastery).

Key Words: Edo Period, Zen Sect, Myoshinji Temple, Priest's Living Quarters, Tenzo

江戸時代 禅宗 妙心寺 庫裏 典座

1. 研究の目的

本研究その1では、臨済宗の本山妙心寺本坊における近世の火番の身分・職務内容等を史料に即して検討した。

これにより天保2年(1831)以前の火番とは、伝法相統を許されない東班僧侶の監寺に限定された職であり、本山庫裏内に居住し、行事の時は齋の統括を行い、日常は碗蔵の管理、什器類の保管・修理、塔頭への貸出し等にあたっていたことが確認できた。

そこで本稿では、同じ妙心寺に関する古文書を通して天保3年(1832)以降の火番の変遷を確認し、同じ内容の職務が天保13年(1842)以降典座寮に移行して行く過程を検証し、実際の本坊建物の使い方について検討を行う。

2. 火番方の変遷

火番方の変化は、『記録』の天保2年11月26日の記述

1) 以降生じる。それは火番方良監寺が病氣のため、代役として行者良全をその任にあてたことより始まる。

翌年の3月11日には火番方良監寺が病氣につき退身したので、行事に差し障るため行者元亮・良源に代役をさせている。

また『記録』の天保6年(1835)2月26日の条には、

衆議ニ舊冬行者方ヨリ中間人少ニ付役向差支ソロ様成行ソロ間俗役人御取立被成下ソロ様出願ソロへ共不克免角願書令返却ソロ尤火番方無人ニ付右様願出ソロ事故監寺取立ノ儀各派へ申入置ソロ然ル處於東海本庵役人名目ニテ栗田爲之進ト申者被召抱俗漢ニテ不差支儀ニソロへハ火番爲動可申段東海執事披露依之遂評量ソロ處奉 敕入寺モ近寄ソロへハ見習出動爲致可然段東海執事へ申入尤於行者方モ諸事無隔意致教諭遣ソロ様副寺ヨリ被申度可然ト也

とあり、代役を勤める行者より役人(俗人)の採用を願出、東海庵が同名目で雇った者を火番の見習いとしてい

ることがわかる。その後、この役人がどのような仕事を行ったかの記述はないが、天保10年(1839)11月23日の条には次のようにあ

* 京都府教育庁指導部文化財保護課 工修

Cultural Properties Division, Kyoto Prefectural Board of Education, M. Eng.

る。

衆議 近年監寺無之 付無據火番方良全エ申付有之
ソロ處此頃行者方人少ニテ即今 開山忌ノ節表役差
支ソロヘハ如何可仕哉伺出ソロ段副寺披露依テ 及評
量ソロ處於各本菴監寺取立無之ソロテハ火番方差支
ソロ間急々相應ノ仁被取立ソロ様各本菴エ申入可然
尤當 開山忌ノ節ハ典座名目ニテ副寺方隨徒ノ内壹
人火番方エ相見舞諸般差支無之様取斗ノ儀副寺エ相
頼可然ト也

これにより、四派本庵のみに許されていた監寺の取立
てが近年ないので、火番方の日常の仕事は行者良全にさ
せているが、開山忌ノ節は副寺方隨徒²⁾ 1人を典座とゆ
う職名で火番方に出動させることにしている。

以上の史料により天保2年以降監寺の採用がないため、
火番方の仕事を行者・役人・副寺の隨徒に代役させてい
る様子がわかる。また天保11年(1840)には、また役人を
雇っているが、やはり長続きはしなかったようである。

3. 監寺の取立て状況

ここで妙心寺内で天保3年以降取立てのなくなった監
寺について『記録』の中より検討を行う。

監寺のことが多く記述されるのは、1740年以降であり、
それ以前は、四派本庵で東班達の僧侶取立てが円滑に行
われていたため衆議に報告されるような状況ではなかつ
たものと考えられる。

監寺取立て状況は、いくつかの点が指摘できる。

1. 出奔・暇を遣わす・寺中徘徊停止等の記述が多
くあり、本山の籍を外されている者がいる。
(梅・令・操・會海・保)
2. 上座取立てから監寺に昇格するまで半年の例が
4件ある。これは『正法山出世位階等法式略記』
³⁾内で10歳の頃に剃髪し、20歳の頃に上座に任
じ、30歳以上で監寺になるとするそれまでの東
班達の制度と異なり、30歳以上の僧侶を本山に
連れてきて、東班達として勤めさせた結果と考

えられる。(祖庭・宗怒・祇梅・知忍)

3. 都寺⁴⁾は、監寺を長年勤めた稀有の人が、年齢
50歳以上になった場合に昇進したものと考えら
れる。(宗逸・宗岐・秀全・匡・智禮)
4. 寛政4年(1792)1月26日の靈雲派の宗鼎取立て
の条には「自本菴監寺後役宗鼎ト申者爲 相勤
— ソロト也」とあり、1人の者が後役の監寺と
して取立てられたことを端的に示している。
少なくとも靈雲派では、当時複数の監寺は存
在していなかったと考えられる。
5. 四派本庵の内、一番小さい聖澤派には監寺取立
ての記述がまったく存在しない。

以上の点により、すでに東班取立てが形骸化し、弟子
として教育するのではなく⁵⁾、年齢相応の僧侶を連れてき
て火番方運用のためだけに、監寺に任じていることがわ
かる。そのため修行に専念する西班僧侶をあきらめたり、
他の寺院より入ってくる等、適当な僧侶がいないとこの
方法では破綻を来すことになる。

そこで妙心寺では、これまで火番方を監寺の職として
いた機構の抜本的な改革を行うことになる。

4. 典座寮の成立

すでに天保10年11月23日に副寺の隨徒を開山忌の時だ
け典座の名称で火番方に出動させたことは前に述べたが、
これはあくまで1回限りの暫定措置であった。しかし
『記録』の天保12年(1841)12月4日の記述に以下のよう
にある。

衆議 監寺無之 付火番方行者 申付置ソロヘ共
行者方人少ニテ差支ソロヘハ監寺無之内典座寮名目ニテ
平僧首座ノ内ニテ兩人充半年替 出動致ソロ様議定可
然乍併新規ノ儀故各派存寄相尋其上ニテ相定可然ト也
これにより、平僧の首座2人を典座寮の名称で半年間
ずつ出動させたいとして、四派本庵に意見を求めている。

この妙心寺派の僧階は、享和2年(1802)正月に江戸の
触頭から幕府に提出した「妙心寺一流僧侶階級并衣體次

表1 妙心寺の東班達取立て年表

年 代	40	1750	60	70	80	90	1800	10	20	30	32	40	1850	57	60
東海派 (長興軒)			59		7881	85	94	99	910	161920	27	31		58	
靈雲派 (蓮珠庵)			56			84	889092	98	8	15					
龍泉派 (古儀軒)	42	46		75		869091	99	4	10	25					
聖澤派 (南陽軒)															

●：記載のある年を現す。○：東班達取立を現す。×：本山の籍を引いたことを現す。——：上座・監寺を現す。——：都寺を現す。

第書」により知られている⁶⁾。僧階は以下の通りである。

喝 <small>かつ</small>	食 <small>じき</small>	8・9歳より有髪のまま寺に入る。
沙 <small>さ</small>	喝 <small>かつ</small>	12・13歳で剃髪受戒をする。
侍 <small>し</small>	者 <small>か</small>	15・16歳で進む。
知 <small>ち</small>	客 <small>きやく</small>	同上。
蔵 <small>そう</small>	主 <small>しゅ</small>	20歳より進む。
首座 <small>しゅざ</small> (後堂)		25・26歳より進む。以上平僧。
座元 <small>ざげん</small> (前堂)		30歳以上。
紫衣之和尚		50歳以上。

この僧階は、住持の下で修行を司る西班僧侶のものであり、この内首座とは、年齢が25歳以上の僧であることが確認できる。

翌年天保13年(1842)1月26日には、四派本庵より典座寮の設置につき異議のない旨が届けられ、2月5日に衆議を行い任期を1年に変更し、蟠桃院の沙首座・光國院の堯首座の2人を典座職に選んでいる。

沙首座・堯首座の最初の仕事は、年中行事と奉教煎點及其他臨時の行事の心得方をまとめることであった。

これは監寺が職務内容の固定した僧侶であり、火番の仕事をも十分に理解していたのと異なり、1年で首座が交代するため、当然最初に手引書が必要となったものと考えられる。

同年5月17日には年中行事の心得方を完成させ副寺に提出している。

ところで妙心寺本坊には『典座寮須知』と書かれた古文書が現存しており、天保13年に製作された年中行事の心得方であると考えられる⁷⁾。

この『典座寮須知』の完成後に議定を行い、四派本庵・副寺・維那で選挙・出勤のことにつき確認を行っている。『記録』の天保13年7月3日の条に以下のようにある。

衆議ニ典座寮年中須知取調ノ儀先達典座方エ申入置
ソロ處此度出来ソロへハ右選挙並出勤中ノ儀件々左
之通令議定可然トノ儀ニテ此段各本菴並副寺方維那
方、申入

一 典座ハ後堂ノ仁ニ相限尤知客侍者達混入持菴ヘモ
選挙之事

一 典座選挙之定日 四月十七日
十月十七日

一 典座交代之定日 正月十六日
七月十六日

一 爲役料銀貳枚宛下行之事

一 副寺交代ノ節典座ノ坐席ハ副寺方隨徒ノ東北寄
リ西面之事

一 副寺寮一會見舞ノ儀其副寺ヨリ頼有之節ハ可被
氣ヲ付事

但シ見舞被相願ソロ共開山忌並奉
養料物引付名額ハ相省ソロ事

一 諸役免許之事

右

これにより典座は後堂(首座)の人を選ぶこと、選挙を4月17日と10月17日に行い、交代は1月16日と7月16日に1人ずつ交代すること、役料並びに副寺交代時の食堂での座る位置等を決定している。

その後翌年の天保14年(1843)11月12日の条に、

衆議ニ典座寮一年交代故開山忌營辦毎年新役ニ相成
不都合ノ趣相聞ソロエハ以来後役撰擧ノ仁月並ノ両
班又ハ隨徒ニテ役寮エ被選ソロ共開山忌ノ節ハ於維
那方座牌相除見習トノ典座方ヘ出勤可然トノ儀ニテ
此段典座方エ通暢可有之様副寺エ申入各本菴並維那
方エモ爲知置

とあり、典座寮が1年交代で毎年開山忌の節は新役となり不都合のため、10月17日に決定している後任の人をこの時だけ、見習いとして典座方へ出勤させることを決めている。

以上のように、天保13年以降は西班僧侶の首座2名が1年交代で、これまで火番が行っていた職務を行い、典座寮と呼ぶようになったことが確認できた。

5. 典座寮の職務内容と本坊建物の使われ方

東班僧侶の監寺では、火番方と呼ばれていた職を西班僧侶の首座が勤めるため典座寮と称することになったものであり、職務内容と庫裏内の執務室の位置は、そのまま移行したと考えられる。

『典座寮須知』により火番方では、断片的な史料の継足しであった職務内容を1年を通して継続的に把握することができる。

『典座寮須知』の構成は、下記の通りである。

1. 奉教入寺・開山忌・諸出入方・臨時の行事・鉢はつ齋さい⁸⁾の節の心得方 5項目
2. 年中行事(表2)
3. 月行事(表3)
4. 副寺選挙用意物
5. 食料品の概算単価
6. 菓子はつの単価

『典座寮須知』で注目できる点は、行事の多くは1人出勤であることが上げられる。(表2の行事の内、下線があるものが2人出勤)

1年間に典座寮が関係する妙心寺の大きな行事は48回あり、後年に追加される行事である檀越の霊忌についても天保13年以降のものは慶応3年(1867)の大森氏各霊忌のみであり、近世中期以降行事の数はほとんど増加していない⁹⁾(表4)。

典座寮では、これら年中行事の前日より祖餉・仏餉・靈餉などのお供えの準備を行っていた。

仏教や宗派の行事では、10月5日の初祖忌(達磨)と

表2 『典座寮須知』年中行事年表

[下線は2人出勤を現す]

月	仏教・宗派の行事	住持の行事	一般行事	檀越の各霊忌	合計	内向きの行事	備考
1月	10 臨済忌 16 般若 17 百丈忌 18 懺法	13 上方参内 28 二条出禮齋	1 奥蔵斎・粥・齋 2 粥・齋 3 粥・齋 11 鏡餅開	5 楊岐院忌 17 常総院忌 23 一桃常見忌	年行事 13回	16 典座寮交代	1,2,3日の粥・齋は文化9年より省略3日満散後に鉢齋あり。
2月	15 涅槃忌			2 平田家各霊忌 4 慧光院忌	年行事 3回		
3月				17 長松院忌	年行事 1回		
4月	8 佛誕生				年行事 1回		
5月	16 般若 18 懺法				年行事 2回		
6月	18 山門懺法			5 法泉院忌 14 明叟玄智忌 16 了然宗郭忌	年行事 4回	祝 繪讃晒 祝 諸道具虫拂	
7月	7 祠堂施餓鬼 15 山門施餓鬼 24 食堂地蔵尊	15 小方丈交代齋		1 慶光院忌	年行事 5回	16 典座寮交代 25 内渡し 副 副寺交代	
8月		1 遷住齋 2 入寺園ヶ上方出置		3 松蔭利貞尼首座忌 6 臨松院忌	年行事 4回		
9月	16 般若 18 懺法			12 大森氏各霊忌	年行事 3回		
10月	5 初祖忌 7 虚堂忌				年行事 2回		
11月	11 法皇忌		冬夜上堂	2 高源院忌 3 八雲院忌 4 見性院忌	年行事 5回	2~4 開山忌味増膳	2,3,4日の檀越の各霊忌は、本来12月の行事である。
12月	8 成道忌 11 開山忌宿忌 12 開山忌 22 大燈忌 29 大應忌				年行事 5回	1 開山忌諸役定 8 開山忌前拵 9 開山忌前拵 10 開山忌前拵 13 檀越並諸道具形付 16 煤拂 25 餅搗 26 迎春準備	檀越の各霊忌は、天保2年より齋を停止し、展待料を支払う。(但し松蔭利貞首座忌を除く)
合計	22回	5回	5回	16回	住持・西洲檀越が参加する大行事 48回	内向きの行事 15回	

*著者が、年中行事をその性格により「仏教・宗派の行事」・「住持の行事」・「一般行事」・「檀越の各霊忌」・「内向きの行事」の5項目に分類を行ったものである。また行事の前の数字は日付を現す。

11月11日の法皇忌(花園法皇)に大方丈の裏の間で行われる鉢齋の準備をした。

そして12月11日~12日にかけて行われた開山忌は、年中行事の中で一番規模の大きいもので、10月の中旬より準備に取掛かり、12月1日に諸役決定と齋の材料の値段の問合わせを行う。そして実際には8日より齋の下拵えを行い、11日には内役衆等に宿忌朝齋・非時を用意した。12日には山内の僧侶等に本坊の膳・碗を用いて粥(朝食)・齋(昼食)を準備した(大方丈南側3室)。

住持の行事では、8月1日に1年間妙心寺の住持を勤める方の遷住齋のため大方丈の裏の間に鉢齋の用意を行い、翌年の7月15日には退山のための小方丈交代齋を準備した。

一般の行事としては、正月3ヶ日に粥・鉢齋を大方丈裏の間に準備していたが、文化8年(1811)閏2月19日の衆議により仏殿造り替えの事業のため、3日目の仏殿動行後だけ大方丈の裏の間に鉢齋を行うこととなり、以後旧に復されることはなかったと考えられる。

年16回存在する檀越の各霊忌の節には^{しどうさい}祠堂齋があり、庫裏の食堂で鉢齋が行われた(ただし、2月2日の平田家各霊忌と8月3日の松蔭利貞尼首座忌のみ大方丈裏の間)。各霊忌とも祖餉15員・住持方5人・諸院78箇院(1院1人ただし輪番所6ヶ院にいる院を除く)・両班6人・副寺方7人・東班2人・行者方6人・扶持人9人の合計122人分の一汁二菜塩山椒の準備を行い、1人銀7分合計で銀85匁4分の費用を当てるのが宝永元年(1704)に定められている。

しかし、これも天保2年(1831)1月25日の衆議により前年の地震による出費補填のため、妙心寺と特に関係の深い松蔭利貞尼首座忌以外の齋は省略されたことが確認できる。

また月行事は9回あり、典座寮では各仏前(神前)に一汁三菜や洗米の御供えを行っている(表3)。

以上のことより典座2人が同時に出勤するのは、齋を伴う大きな行事や同職に関係する内向きの行事のみであることが確認できる。

一方、臨時の行事については、『奉教入寺・居成改衣須知』と書かれた古文書が現存している¹⁰⁾。

『奉教入寺・居成改衣須知』の構成は、以下の通りである。

1. 居成改衣と再住改衣行事の相違点 3項目
2. 奉教入寺の際の注意点 83項目
3. 当日時刻之事 26項目
4. 排膳之次第
5. 飯炊釜数・味噌・酒（の配分）
6. 出世式諸出駕傭人の賃錢
7. 煎點之控 4項目
8. 御膳部操り出之次第
9. 荘様ノ傳
10. 土器寸法並註文扣
11. 木具寸法並註文之扣

これによると奉教入寺の際に典座寮では、10日程前より準備に取掛かり、儀式は3日に渡って行われる。

初日は、入寺を行う僧侶が、小方丈に入る内移りが行われる。2日目には、敕使を門前の塔頭にお迎えする。そして3日目に、敕使より妙心寺の住職となる綸旨を頂戴して、入寺の儀式を行い、直ちに宮中に参内する。

この間庫裏では、表5のような食事を準備し、2日目270人前後、3日目は500人～700人程の食事が用意されている。

これらの食事は、身分・職務等により本山・塔頭の施設の中で食される場所を異にしている。一例として3日目の齋を取上げると表6となる。

これによると行事の運営を行う執事・副寺やその他の内役衆は、法堂で上堂の前後2回齋を食しているが、いずれも執務室（評席）や内役衆の控室となる食堂など庫裏内の部屋を用いている。また実際の調理や敕使・宮中参内のお供をする下部は、飯臺を用いて庫裏の板の間で齋を頂いている。そして齋の中心となる一番座・二番座は、大方丈の南側3室に本坊の膳と椀を用いて準備されたことが確認できる。

また直接これらの食事を調理する人は、表6に書かれている下部150人の内、100人程と考えられ、調菜・膳方・走下・水汲・上ノ火焼・下ノ火焼・煮方・炒方・同火焼・飯盛・小遣・椀洗・火守・火燃・湯番・荒物元占・味噌元占・手明（勝手向ノ總取締役也）等の職名で雇われている。

典座寮はこれらすべての下部の監督を行うと共に、常住・點心寮・敕宿等へ遣わす諸道具の点検を行っていることが確認できる。

弘化以降は、安政5年(1858)に東海派より東班達の上座に掛籍したものに火番方見習いをさせたいと願出、本山が許可を与えているが、典座寮の組織内容に大きな変化はなく、明治を迎えることになったと考えられる。

表3 月行事

	月行事	お供え
1日	本尊佛饗	一汁三菜香物
5日	韋駄天洗米	洗米
	祥雲院靈供	一汁三菜
7日	鎮守洗米	洗米
	後柏原院靈供	一汁三菜
15日	本尊佛饗	一汁三菜香物
19日	韋駄天洗米	洗米
21日	鎮守洗米	洗米
24日	食堂地藏尊佛饗	一汁三菜

*表4の檀越の各霊忌年代は妙心寺本坊庫裏食堂内に掛けられた『月分須知』と書かれた看板より引いたものである。

表4 檀越の各霊忌年代別表

	年行事	月行事
大永		1
天文	1	
天正	1	1
文禄	1	
元和	3	
寛永	3	
慶安	1	
承応	1	
明暦	2	
寛文	1	
安永	1	
慶応	1	
合計	16	2

表5 奉教入寺3日間の飯炊釜数

	食事	釜数	食事人数
1日目	内移り	2釜半	不明
2日目	前日齋	8釜	約262人
	晩炊	8釜	約273人
	薬石	1釜	約268人
3日目	朝小食	9釜	約448人+α
	齋	17釜	約693人+α
	合計	45釜半=米9石1斗	

ただし、1釜は2斗炊き、内5升は焦げになる。

表6 奉教入寺当日の齋

齋の場所	人数	身分・職務内容
敕宿	約80人	(AM6:00 齋に廻る)
裏の間	約35人	新命並役位小食 (胡乱座の間)
新寮	約15人	参内供奉・位頂供奉の侍 (胡乱座の間)
大庫裏	約70人	参内供奉・位頂供奉の下部 (胡乱座の間)
裏の間	約20人	敕使の供奉(煎點了ルト)
評席	18人	轉・献・時・斷・放新(幀)
食堂	約50人	内役衆(小食)
裏の間		侍の頭(上堂始ルト)
新寮	約17人	若黨 侍分6人
大庫裏		下部 11人
小方丈	約30人	奉教入寺の僧侶と弟子他
坊焼3室	約50人	一番座・妙心寺派の僧侶
檀宿	約35人	奉教入寺の僧侶の檀越
小方丈		諸山隨喜衆
小書院	(多摩嘴)	(五山・大徳寺)
大庫裏	150人	下部
不明	5人	他行者(一番座了ルト)
坊焼3室	約50人	二番座・妙心寺派の僧侶
裏の間	人数不明	諸山隨喜衆・雲衲等(接待)
評席	18人	轉・献・時・斷・放新(幀)
食堂	約50人	内役
新寮	人数不明	近郷の者
合計	約693人+α	

*敕宿とは、入寺式の行われる前日に敕使が泊まる。

妙心寺門前の塔頭

*檀宿とは、入寺する僧侶の檀越の泊まる宿舎

6. 結論

妙心寺本坊では、天保3年以降、監寺の取立てがないため、火番方を行者・役人（俗人）・副寺の随徒で代役させていたが、天保13年にはそれまでの制度の抜本的改革が行われた。

すなわち、伝法相統が許される西班僧侶の内、25歳以上の首座と呼ばれる僧階の者2人を1年交代でその任にあて、これまでの火番寮の名称を典座寮と改めていることである。以後明治に至るまで典座寮が存在し、それまでの火番と同じ執務室が庫裏内で与えられていたと考えられる。

職務内容については、『典座寮須知』・『奉教入寺・居成改衣須知』により1年を通して把握でき、齋を伴う大きな行事は2人出勤であり、他は1人ずつ交代で勤めている。典座寮では、これらすべての齋を統括し、什器類の管理を行っていた。

本論文では、火番寮から典座寮への変化を職名より検討を加え、本坊建物の使われ方について一例を示した。

しかし江戸時代後期の妙心寺本山を経営の面より見ると、文化6年(1809)の開山 450年遠忌や文政13年(1830)まで実に27年を費やして造り替えの行われた仏殿、また同年7月に起きた地震による建物の修繕により寺院経営が逼迫して行く状況が確認される。これにより文化以降数次に亘って寺院の行事の縮小が行われている。

特に天保2年(1831)1月25日の衆議では、初祖忌の鉢齋・祠堂齋・正月3日満散齋等の省略が検討されるなど火番方を必要とする齋を伴う行事の縮小が行われている。

このような状況も1年交代で齋を統括する典座寮の成立を促す遠因になったものと考えられる。

以上により妙心寺本坊では、本来衆僧の食事を司る職位とされる典座寮が、行事における庫裏の炊事施設の使用回数が減少した天保13年に成立したことが確認できた。

今後は、妙心寺の建築全体を考察する上で、他の禅宗寺院の組織と比較検討を行うことが不可欠であるが、これらの点については、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究を進める中で、宗教法人妙心寺の法務部・塔頭 雑華院・同春浦院等に史料閲覧の便宜を計って頂いた。記して感謝の意を表します。

注

- 1) 拙稿：火番について、日本建築学会計画系論文報告集, No. 467, pp173 ~ 179, 1995.

- 2) 副寺方随徒とは、副寺の弟子のことである。副寺は、延宝7年(1679)7月26日の壁書により飯費として7人扶持を与えられた。
- 3) 妙心寺慈雲院寄託蔵書 [花園大学保管] 注1 論文内 pp174, 17行目~22行目参照
- 4) 都寺の職錢香資展待料・位次や開山忌・入院時の座を決定したのは、元禄16年(1703)6月5日の壁書であり、近世の本山で同職が設けられたのはこの時である。
- 5) 妙心寺の明暦3年(1657)11月11日の壁書には、
一 東班達之仁者經二十年之戒臘而可任監寺者也
とあり、17世紀には東班達の弟子を院内で養育している状況が確認できる。
- 6) 『古事類苑』宗教部十 佛教十 禪宗
- 7) 『典座寮須知』：和綴本で24丁に渡りその内容が記述されている。製作年代は、年中行事の内に天保13年以降のもとして慶応3年(1867)の大森氏各霊忌が記述されているが、この部分のみ明らかに後年に書き加えられたものである。これによりこの須知が、天保13年に製作され、慶応年間まで活用されていた証拠となろう。
- 8) 鉢齋とは、僧侶各自が食事に用いる鉢を持参し、その鉢に盛付けてもらい齋をいただく。本山の膳や碗を用いないので準備・跡片付けが少ない。
- 9) 『副寺寮須知』（雑華院蔵）内の書記寮書式によると祠堂施齋料として白銀5貫文を収めることにより毎年の命日に一山の僧侶により諷経回向が行われ、齋が催されたことがわかる。
- 10) 居成改衣とは、前堂の僧侶が綸旨を頂戴して、妙心寺の住職となる儀式で、この際これまでの黒衣より紫衣を着ることが許される。
奉教入寺とは、朝廷からの敕使をお迎えし、綸旨を頂戴して、妙心寺の住職になることである。この時住世帳（妙心寺第〇〇世）に名を残すことになる。多くの場合、居成改衣を行った僧侶が妙心寺に再度入寺を行い「再住の綸旨」を賜る。いずれも臨時の儀式であり、妙心寺の住持として1年間本山に住山することと必ずしも一致しない。
奉教入寺は多い年で3回行われ、居成改衣は奉教入寺が行われた後、5人まで連続で行われた。
『奉教入寺・居成改衣須知』：和綴本で39丁。
天保13年に製作されたと考えられる。

(1995年6月1日原稿受理, 1995年10月16日採用決定)